

校訂 金剛般若經集驗記 (六)

大東文化大学文学部 山口敦史
 蓮花寺佛教学研究員
 国際日本文化研究センター機関研究員 今井秀和
 名桜大学准教授 迫田(呉)幸栄

A revised edition of the *Kon-gō-han-nyā-kyō-shū-gen-ki* (6)

Atsushi YAMAGUCHI
 Hidekazu IMAI
 Sachie Kure SAKODA

凡例

一 凡例は、「校訂 金剛般若經集驗記(五)」(大東文化大学紀要(人文科学)第五十五号、二〇一七年三月)に同じ。

12 李丘一

(本文)

揚州高郵「音尤」縣丞李丘一、萬歲通天元年二月二十九日卒。得重病便亡。初死之時、有兩人來追、云我姓段、不道名字。直言王追。不許覽住。于時同被追者、五百餘人、男皆著枷、女皆反縛。並驅向前。行可數里、有一人乘白馬朱衣、手執弓箭、高聲唱言。「丘一難追。何不與枷著。」丘一即諮段使。「祖父五品、身又任官、不合著枷。」所言未畢、忽然遍身咸被鎖之。莫知其由。更行十餘里、見大槐數十樹。一一樹下有一馬槽。即問段使。「此是何處。」報言。「五道大神。錄人間狀。於此歇馬。」丘一聞此、方始知死。被勸前行、遂到王門。見一人抱案。容色忿遽。語段使曰。「王遣

追人、何意遲晚。」段使更不敢語。即將丘一分何案主。語丘一言。「此人姓焦、名策。是公本案主。可隨見王。」

焦策即領見王。王見丘一來、瞋責云。「李釋言聚會親族、殺他生命、以爲歡樂。不知慙愧。」所稱釋言、乃是丘一小字。須臾即見所殺畜生、咸作人語。「某乙等今追怨家來到。大王、若爲處分。」焦都即前諮王。「李釋言今未合死。緣所被殺者、欲急配生處、所以追對。」王自問曰。「你平生已來、作何福業。誦持最勝第一經以否。」丘一憶生時不作功德、唯放鷹犬。忽憶往造一卷金剛般若經。王聞金剛般若經、即起合掌。喚釋言上階。冥中喚般若經名最勝第一功德經。語畜生云。「你且向後。」喚焦策來。可領向經藏處看驗。其王廳側、有一處所。看無邊畔。中有一殿、七寶莊嚴。令丘一上殿。於藏中抽取一卷經、開看、乃是丘一所寫之經。更檢得請僧疏一張、是丘一寫書處。問焦都云。「生平亦數造功德、何因唯見兩處。」公當官、非法取錢、欺抑貧弱。此是不淨之物。所修功德、自資本主。不忤公事。」領迴見王、王問所寫經是實不。可喚畜生來、善言辭謝。但許爲造經。此終不留。少間、所殺畜生、一時同到見王。王遣丘一、爲造般若經言託。其畜生並散去。王言。「此功德無盡。」語焦策可即放還。更莫留住。

送出城門之外、再三把丘一手。「焦策盡力相爲只得。」丘一許乞策錢三百貫。「家中唯有爾許、有時實不敢惜。」策報丘一言。「縱乞萬貫、終是無益。乞公爲策造般若經二十部。」丘一便即許諾。又云。「策雖冥吏、極受辛苦。若無福助、難以託生。公努力相爲寫經、幸莫滯策生路。」

遂更前行、策指示一處。下看、深而且黑、拒不肯入。策推之落黑坑中。驚怕眼開、乃在棺內。困而久不能語。聞男女哭聲、細細聲報云。「莫哭。我今得活。」丘一婦弟獨孤棺、爲閩州參軍事。知三月四日欲殯、所以故來看殯。雖聞語聲、不許開棺而視、云是「起屍之鬼」。亦不須近。男女不用舅語、遂即開棺。丘一微得動身、出棺。三日具說冥事。至三月八日、家中大小咸捨衣物、及所有料錢、請僧轉金剛般若經。爲一切怨對造一百卷。爲焦都寫二十卷。未了。至一夜、有人打門、報云是焦策。丘一即令報云。「正寫欲了。必不孤負、何忍更來。」策云。「請報李丞。亦無別事、蒙公爲策造經、已放託生、故來告別。」揚州長吏學懷遠、知丘一再活、喚問冥事。具錄奏聞。奉恩勅加階賜五品。遣於嘉州道招尉乘驛。從梓州過時熱、就姚待亭子取涼、親爲待說。并留手書一本。

(校異)

釋(改意)——釋

檢(高・日)——檢

(大意)

揚州、高郵県丞である李丘一は、万歲通天元年(六九六年)二月二十九日に死亡した。重い病を患って死んだ。死んだばかりの時、二人(の追っ手)が追ってきた。自分の姓を述べなかった。王(閻羅王)は捕らえろと、面と向かって言った。少しの猶予も許さなかった。その時、同じく

捕らえられた者が五百人あまりいて、男はみな枷をつけていて、女はみな両手を後ろに縛られていた。二列に並べ、前に進んでいった。数里進んだところ、赤い服をきた白馬に乗っている人が一人いて、手に弓矢をもって、大声で唱え言った。「李丘一はなかなか捕らえられない。なぜ枷をつけさせないのだ。」李丘一はすぐさま段と名乗った使者に相談した。「祖父は五品の官人であり、自身も官職についていたので、枷をつけるのはそぐわない。」そのことは終わらないうちに、突然全身すべてが鎖につながれた。その理由を知らなかった。

さらに十余里進むと、大きな槐樹数十本が見えた。一本一本の木の下に馬槽が一つあった。(李丘一は) すぐさま段という使者にたずねた。「ここはどこか。」(使者は) 答えて言った。「五道大神である。人間界の状況(様子)を記録する。ここで馬を休ませている。」李丘一はこれを聞き、(それで) 初めて死んだことがわかった。(もっと) 前に進むことを勧められ、ついに王門にたどり着いた。案(厚い書類)を抱えた一人を見た。とても急いでいる様子だった。段という使者に語って言った。「王に遣わされ、人を捕らえに行つたのに、なぜこんなに遅くなったか。」段という使者はこれ以上なにもいえなかった。すぐさま李丘一を誰か担当(者)に振り分けた。(段は) 李丘一に一言語つた。「この人は焦という姓で、名は策である。この案件の担当だ。ついていけば(閻羅) 王に会える。」

焦策はすぐに李丘一を引き連れて(閻羅) 王に会わせた。(閻羅) 王は李丘一が来るのを見て、怒って責めて言った。「李釈言は親族と集まり、殺生し、それを歡樂とした。慙愧することを知らなかった。」この釈言と称されたのが、丘一の幼名であった。しばらくしてすぐ、その殺された畜生がみな人のように喋るのを見た。「我らが追いつめた敵が、今ここに到来した。王様、処分をいかが致しますか。」焦策はなおすぐに前に出て(閻羅) 王に語つた。「李釈言は、まだ死ぬべきではない。彼らは殺されたもので、急いで生まれる所を采配して欲しいが故に、(李釈言を) 追つて(ここで) 突き合わせたのである。」

王は自ら尋ねて言った。「汝は生来これまで、どんな福業をしたか。『最勝第一経』を読誦しなかったか。」李丘一は生きていた間、功德は作らなかったと記憶していた。ただただ、鷹や犬を放つていた。突然、過去に一卷の『金剛般若経』を作つたことを思い出した。(閻羅) 王は『金剛般若経』だと聞き、すぐさま合掌した。李釈言を上階に呼んだ。「冥府の中では『金剛般若経』の名を『最勝第一功德経』と呼んでいる。」畜生に語つて言った。「汝はしばし、後ろに下がつていなさい。」焦策を呼んで来させた。経蔵所に連れて行き、検証させた。

その王の広間の横に、ある一つの場所があった。周辺には境目がなかった。その中には御殿が一つあり、七宝で厳かに飾り立てられていた。李丘一を御殿に上がらせた。蔵の中から一卷のお経を取り出し、開けてみると、(それは) 李丘一が書いたお経であった。さらに、僧に請うたお経の注釈書一枚を拾い得た。これも李丘一の書写したものであった。(李丘一は焦策に) 尋ねると、さらに焦策が言った。「生来いくつか功德も作つたが、なぜか二カ所しか見えない。公(李丘一) が官職に就いていた時、非法にお金をとつたり、貧困者や弱者を欺したり抑制したりした。これは不浄なものだ。(しかし) 修めた功德は、けっきょく自分に資するものだ。公務に逆らうな。」

(閻羅) 王のところに連れ戻し、(閻羅) 王がそのお経を書いたことが本当かどうかを聞いた。畜生を読んで来させて、よい言葉で謝罪させることを良しとした。ただし、彼らのためのお経を作ることを約束させた。ここにはこれ以上引き留めなかった。少し経ってから、その殺された畜生たちが、時を同じくして一遍に王に謁見しに来た。王は李丘一を遣わし、彼らのために『金剛般若経』を作らせるという言葉を託した。その畜生たちは同時に散り去った。王は言った。「この功德は無尽である。」と。焦策にすぐさま話して、帰していいと語った。これ以上引き留めるな、と。城門の外に送り出したら、(焦策は) 再三、李丘一の手を引っ張った。「(わたし) 焦策は、李丘一のために尽力して、何を得られただろうか。」李丘一は三百貫の銭を用意するので許しを請うた。「家中にはわずかなものしかないが、この際、惜しんでいられない。」

焦策は李丘一に返事して言った。「たとえ万貫(の銭)を与えられても、ついには無益となる。公は焦策のためにお経を二十部作ってくれないだろうか。」李丘一はすぐさま許諾した。(焦策は) また言った。「わたくし焦策は冥府の遣いだが、大変な苦勞をうけている。福の助けがなければ、なかなか生まれに行けない(転生できない)。公が努力して、焦策のためにお経を書いてくれたら、幸いにも焦策の生路は滞らせない。」

ついに、さらに前に進んで、焦策が一カ所を指示した。下を見ると、深くかつ黒かったので、入りたくないと思ふ。焦策は李丘一を押しして黒い穴に落とした。驚き怖がって目を開いたら、棺のなかにいた。久しく閉じ込められ、喋ることができなかった。男女の泣き声を聞くと、細々とした声を返して言った。「泣かないでくれ。私は(いま) 生きている。」

李丘一の妻の弟、独孤愔が閩州参軍事に就いていた。三月四日に棺を墓地へ運ぶ(埋葬する)ことを知り、故に殯(もがり)を見舞いにきた。話し声が聞こえたが、棺を開けてみることは許されず、(周囲はこれを)「起屍之鬼」(起屍鬼)だと言う。近寄ることも許さなかった。男女は独孤愔(舅・妻の兄弟)の言葉を聞かず、ついすぐさま棺を開けてしまった。李丘一はわずかに体を動かし、棺を出た。三日間の冥府での出来事をつぶさに語った。三月八日に至り、家中の大小すべてのものや衣服、及びすべてのお金をはたいて、僧侶にお願いして『金剛般若経』を転写してもらった。一切の怨念に対して、百卷の『金剛般若経』を作った。焦策のために、さらに二十巻を書いた。また書き終わらないある夜(に至り)、ある人が門を叩き、焦策だと報じて言った。李丘一は、すぐに返して言った。「(今) まさに書き終わるところだ。絶対裏切らないのに、なぜ(忍んで) またきたのだ。」焦策は言った。「李丘一様に報じて願いたい。特に何かがあったわけではなく、公が焦策のために『金剛般若経』を作ったおかげで、すでに放され、転生することになったので、故に、告別を言いに来た。」揚州の長吏である学懷遠が、李丘一が再び生き返ったことを知り、呼んで冥界のことを聞いた。つぶさに聞いた話を記録し(皇帝に)報告した。皇帝の命令をうけ、階級を上げられ、五品を授かった。嘉州、道招尉乗駅に遣わされた。梓州を通った際、暑さから姚待のあずまやで涼みをとった時、自ら姚待に語った。並びに手書きの一冊を残した。

(本文)

贊曰、猗與大聖、妙慧攸同。無心而應、無念而通。不盡於有、不住於空。何思何慮、而有成功。

(校異)

なし

(大意)

贊に言うことには、「ああ、大聖であることは、すぐれた智慧を持つことにひとしい。無心の境地にして応現、無我の境地にして通力をそなえている。有(存在世界)において尽きることなく、空(実体のない世界)にて無住・無相である。なんと思慮にあふれていることよ。功德を成就することまぢがいなし」と。

(本文)

誠應篇第六(并序十章)

昔者宗・景移星、魯陽迴日。孟宗擢笋於冰序、劉殷拾董於霜辰。礼良之雲、言未終而已合、景山之雨、車所到而咸霑、況乎無受無心、誠而必應。無爲無得、感而遂通。行不執之慈、深仁普洽。導不知之慧、聖賢監遐。覃、德無遠而不該。豈唯三界。明無幽而不察、何止十方。故以誠應之篇、繼之於後。

(校異)

宗(日イ・黒)―宋 ※日光本は「宋」の右横に「イ宗」とある。

遐(改意)―監遐

(大意)

誠應篇第六(并序十章)

その昔、宋景は星を動かし、魯陽は太陽を招き返した。孟宗は筍を氷の張る寒い季節に引っこ抜き、劉殷は董(なずな)を霜の降りた朝に拾っ

た。礼良の雲は、言葉がまだ終わらないうちにすでに気持ちを通じ合らし、景山の雨は、車の至るところにみな潤いをもてば必ず応現があるし、絶対不変の聡里の心境・有にもとらわれない境地を持てば、感応があり、ついにその思いが仏に通ずるのである。とらわれの心を持たない慈悲の行を通じて、深い仁が広く行き渡り、(さかしらの) 知を持たない真実の心のはたらきに導かれて、聖人・賢人(の教え) ははるか遠方まで及ぶ。その徳は遠く備わらないことは決してないので、どうして三界の迷いの世界にとどまっているのであろうか。明るい智慧の光は奥深いが見えないということではなく、(その程度は) どうして十方(四方・四隅)にとどまることになるのか(もっと広がるのだ)。よって、誠応篇を置くことよって、この後に続ける。

1 清虚(その一)

(本文)

梓州慧義寺僧清虚、俗姓唐氏、以聖曆元年六月内、在豫州、正逢亢旱。官人士庶、祈禱不獲、百姓惶惶、罔知所向。其僧即入禪院佛前、至心啟請、「願諸佛大慈、龍王歡喜。降施甘雨、救濟蒼生。弟子至明日中時、爲龍王等誦一百遍金剛般若。願日中時、早降甘雨。」及至明日中時、誦經亦竟、天即降雨、溝渠泛溢、原隰普霑、潤澤有餘、靈驗若此。

(校異)

なし

(大意)

梓州、慧義寺の僧侶である清虚の俗姓(俗名)は唐氏であり、聖曆元年(六九八年)六月のときに豫州にいて、まさにひどい干ばつに遭っていた。官人士庶(官吏・武士・庶民)みなが祈禱しても(雨水を)得ることが出来ず、百姓はひどく恐れ、どうしたらいいかが分からなかった。その僧(清虚)はすぐ禪院に入り、仏の前にて、至心をもって(まごころをもって)このように乞うた。「諸仏による大きな慈悲、竜王が歓喜することを願う。甘雨を降らせて下さり、蒼生(人々)を救済して下さりたい。弟子(清虚)はあしたの昼時まで、竜王さまなどのために『金剛般若経』を百べんお読みする。日中の時にはすでに甘雨を降らしていることを願う。」翌日のお昼時までかかり、読経も終わると、天からすぐさま雨が降り、溝渠(水路)が氾濫し、平原や低く湿った場所すべてが濡れて、潤いがありあまった。靈驗とはこういうことである。

2 清虚(その二)

(本文)

聖暦二年五月内、清虚在唐州桐柏縣常樂山中、常樂寺坐夏。還逢天旱、五穀焦卷。土人打鼓燒山、以此祈雨。求之歷旬、邇無徵應。遂將泥水入寺、將欲澆灌諸僧。其僧報言、「檀越莫汗濕師僧。貧道爲檀越祈雨、明日必足。」其從五月二十日之午、入道場誦般若經、比至明日中時、天遂降雨、須臾並足。高下普霑。

(校異)

なし

(大意)

聖暦二年(六九九年)五月のうち、清虚は唐州桐柏県、常樂山中の常樂寺にて坐夏(夏の期間、一所に籠って修行すること)していた。また干ばつに遭い、五穀が枯れた。土地の人が太鼓を打ち鳴らし、山を焼き、それをもって祈雨をした。雨を求めて数十日、予兆・反応(回答)がかえってこなかった。ついに泥水を寺に入れ、(それを)諸僧侶にかけようとした。その僧(清虚)は返事して言った。「檀越は僧侶を汚したり濡らしたりしないように。われらが檀越のために祈雨し、あしたは必ず満足させる。」それ(清虚)が五月二十日のお昼(午の時刻)から道場に入り『金剛般若経』を誦し、翌日の昼時(中時)に及んで至り、やっと天から雨が降り、またまた、ちょうど足りた。高いところも低いところもすべてが濡れた。

3 清虚(その三)

(本文)

大足二年五月内、屬亢陽。奉勅遣州縣祈雨、合京城師僧二十口祈請、一滴不得。其僧清虚、遂向豊國寺見復禮師、平章祈雨。禮遂問其僧、「阿師將何法祈雨。」報云、「將十二面觀世音呪及金剛般若經、精心誦念、以此祈雨。」云。「幾日可得雨足。」答言、「三日三夜、雨必得足。」復禮愠而言、「饒你七日祈請。如其七日不雨、送你與薛季昶枷項。遣你作餓死鬼。」僧聞此言、心增激勵、報復禮曰、「明日食時、雨下未足、非滿三日、雨必普霑。」其僧即入道場、至心念誦。比至明日食時、雨即便降、可得四五寸。還即却晴。復禮弟子元濟、語清虚言、「明日即是三日滿。今見十里無雲、不知阿師將何爲驗。」答言、「不須愁。雨三日内必足。」及至明日向暮、天上猶無片雲、清虚精心懇發、恐無徵効。重啟十方諸大菩薩、羅漢、聖僧、

一切賢聖弟子、「今日一心爲法界蒼生祈雨。如今夜雨若不足、弟子於此處捨命。」以爲蒼生、遂竭誠至心誦金剛般若、二更將盡、雨遂滂沱。比及天明、一尺以上。周迴五百里內、甘澤並足。威神之力、巍巍如是。從此祈雨、便向豐國寺坐夏。

其年仲冬季冬、並無雨雪、律師懷深、又遣請雪。一心念誦金剛般若、至于三日、還蒙上天降雪。其靈驗有如此者。

(校異)

復(黒・日)―復

(大意)

大足二年(七〇一年)五月のうちは干ばつであつた。皇帝の命令により、州県に祈雨をさせ、合わせて都の師僧二十人が祈つたが、一滴も得ることができなかつた。その僧、清虚は、よつて豊國寺におもむいて復礼という師に会い、祈雨についてとり計らつてもらおうとした。復礼はその僧(清虚)にきいた。「師はどんな法で祈雨するのか。」返していうには、『十一面觀世音呪』及び『金剛般若經』を心を込めて(入念に)誦誦し、それをもつて祈雨します。」(復礼が) いうには、「雨(水)が足りるまで何日かかるか。」答えて言うには、「三日三夜ならば、必ず十分な雨(水)が得られる。」復礼が恨みがましく言うには、「あなたには七日間の期限をゆるす。もし七日に達しても雨が降らなかつたら、貴様を薛季昶(のものと)に遣り、首かせ(枷項)をさせる。貴様を餓死鬼(餓死した靈)にさせてやる。」僧(清虚)はそのことはをきき、心が一層激励され、復礼に返していうには、「明日、食時(午前八時ごろ)、およびその後の二時間。または午前八時前後の二時間)、降雨がまだ足りないが、三日未滿(のうち)に、雨(水)が必ずすべてにおいて満たされます。」

その僧(清虚)はすぐさま道場に入り、心を込めて念誦した。翌日の食事時まで待つと、雨がすぐさま降り、四五寸をえられた。(しかし)すぐ再び晴れに戻つた。復礼の弟子である元済が清虚に語つて言うには、「明日で三日が経つ。いまはどこをみても(遠くまでみても)雲がなく、師はなにをもつて実現させるかわからない。」答えていうこと、「憂う必要はない。雨(水)は三日以内に必ず足りるようになる。」翌日(明日)の夕暮れに至り、天上は依然と雲がまったくなく、清虚は心をこめて懇願を發し、効験がないことを恐れ、重ねて十方の諸大菩薩、羅漢、聖僧など、一切の賢聖の弟子に述べて言うには、「本日、一心に法界・蒼生(人民)に祈雨しています。もし今夜に至つても雨(水)が足りなかつたら、蒼生(人々)のため、弟子はここに命を捨てます。」

そして、誠心誠意に今『金剛般若經』をよみ、二更(午後九時または午後十時から二時間)が終わりそうな時、ついに滂沱の雨が降つた。明け方まで待つと、一尺以上(雨水が)あつた。周廻五百里内が慈雨で満ち足りた。威神の力は、すばらしいものである。それ以降(も)祈雨し、豊

国寺にて坐夏した。その年の仲冬の時期、雨も雪もなく、律師が深く憐れみ、また雪を祈禱するようにさせた。一心に『金剛般若経』を念誦し、三日に至っては、再び空より雪を降らせてくれた。靈験とはこういうものである。

4 清虚(その四)

(本文)

長安三年、清虚從悟真寺坐夏。訖至七月二十日、暫入城中、向資聖寺停。至八月一日、天降大雨、直至五日不絕。米麥涌貫、車馬不通。百姓追惶、莫知生計。其僧至五夜、忘寢與食、平曉嚴持香鑪、遂入佛堂、方欲啓請、念誦般若、以止於雨。三五衆僧下堂來見、語其僧曰、「阿師欲作何物。」報云、「欲念誦止雨。」僧等咸曰、「可由你止得。幾許漫作。」其僧答言、「此亦難信之事、以兩貫敵一貫。共阿師倍賭。」「音觀」一一限時、不勞到暗。」其僧等言、「容你到暗得止、我請輸你一貫。」清虚報言、「誦滿十遍、且得雨止。誦十五遍、即遣雲高。至二十遍、即遣日出。至二十五遍、四邊雲散。至三十遍、除雲總盡。」僧等聞出此言、即擎其僧衣被將去。「伊既出此矯言、前身負我衆物遣伊。故出此語、亦不能自知。」其僧即入道場、誦金剛般若。恰至十遍、雨即得止。至十五遍、雲高。至二十遍、日出。其僧等見此稍異、咸亦驚駭。至二十五遍、四面之雲、一時散盡。僧衆失聲齊叫。至三十遍、除雲總盡。僧等一時起至、欲縛其僧。報云、「你非是娑竭龍王。晴亦由你、雨亦由你。」其中有解事者、瞋訶始休。嗟乎、般若威神、非言能述。下士聞道、必大笑之。去長安三年十月内、駕幸東都。至十一月末、清虚向衆香寺停。從十月直至十一月無雪、衆香僧衆、請清虚祈雪。其僧即入道場、一心念誦金剛般若、限三日内雪足。誦滿三日、天降大雪一日一夜、遠近咸足。亦般若之靈驗也。

(校異)

馬(黒・日)―□

報云(黒・日)―□□

東都(黒・日)―□□

直至十一(黒・日)―□□□□

大(黒・高・日)―□

(大意)

長安三年(七〇三年)、清虚は悟真寺で座夏を始めた。七月二十日まで至り、しばらく城に入り、資聖寺に向かい、とどまった。八月一日に至

り、天から大雨が降り、ずっと五日間もやまなかった。米や麦がどんどん高くなり、車馬が通れなくなった。百姓が恐れ、苦しみ困り、生計をどうたてればいいのか分からなかった。その僧（清虚）は五日（目）の夜に至り、寢食を忘れ、平曉の時に香炉を厳かに持って仏堂に入り、まさに（仏菩薩などの神明に許しを）請おうとしていて、『金剛般若経』を念誦し、それをもって雨を止めようとした。何人かの僧侶がお堂に降りて見にきた。その僧（清虚）に語っているには、「師はなにをしようとしているのか。」答えているには、「お経をよんで雨を止めようとしている。」僧らみながいうには、「なにゆえに貴様がとめられるのか。無駄な行為をどれだけするのか。その僧が答えているには、「これは信じられないだろうが、二貫（の金銭）をもって一貫に対抗するつもりだ。師（たち）の倍で賭けよう。時間制限を設け、暗くなるまで煩わさない。」

僧らがいうには、「貴様が暗くなるまでに止ませたら、わしが貴様に二貫負ける。」清虚が返しているには、「十遍読み終わると、雨が必ず止む。十五遍読み終わると、すぐさま雲を高くさせる。二十遍にいたれば、日を出させる。二十五遍にいたれば、あたり（四辺）の雲が散っていく。三十遍にいたれば、雲が取り除かれ、すべてが消える。」僧らはそのことを聞き出し、すぐさまその僧（清虚）の衣服を持って去ろうとした。「貴様がこの虚偽の言葉を出した以上、私が前世で背負った諸々のものを貴様に遣らう。ゆえにこの言葉が出た。もはや自分のことを自分で知ることが出来なくなった。」その僧（清虚）はすぐさま道場に入り、『金剛般若経』を読誦した。ちょうど十遍に至ると、雨をすぐに止ませることが出来た。十五遍に至り、雲が高くなった。二十遍に至り、日が出た。その僧らがこの甚だしい異変をみて、みな並びに驚愕した。二十五遍に至り、あたりの雲は一度に散り消えた。僧らは思わず一斉に叫んだ。三十遍に至り、雲が取り除かれ、すべてが消えた。僧等は一度に体を起こして駆け出し、その僧を縛ろうとした。報じていうには、「お前は娑竭龍王ではあるまいか。晴れもお前次第、雨もお前次第。」その中に事情のわかるものが出て、憤怒が初めて収まった。ああ、『金剛般若経』の威力は、言葉ではのべられない。分からない人が聞いたら、必ず笑うだろう。

さる長安三年の十月のうち、皇帝が東都に行幸した。十一月の末に至り、清虚は衆香寺に迎え留まった。十月から十一月に至るまで雪がなく、たくさんの香を焚きしめた僧たちが清虚を請うて祈雨してもらった。その僧（清虚）はすぐさま道場に入り、一心に『金剛般若経』を念誦し、三日以内に雪を足らすように期限を設けた。（『金剛般若経』を）読んで満三日、（天から）大雪が一日一夜降り、遠いところでも近いところでもすべて足りた。やはり『金剛般若経』の靈験たるゆえである。

5 清虚（その五）

（本文）

長安四年十一月内、本平公主奏清虚。爲大聖天后患風、入内念誦二七日。勅問。「阿師是住寺僧。爲客僧。」遂對云、「是住寺僧。」公主及宮人語其僧言、「阿師誑勅。大合有罪。且放阿師出去。」其僧自恨薄業、悞對聖人、卽入道場、乞一境界、唯誦金剛般若経、一日一夜、夢見兩僧向衆香寺

禪院、問主人曰、「清虚師身名不知立未、祠部僧籍安名以否。」主人報言、「欲似尚未。」其僧語清虚曰、「日西爲阿師安名。」及至神龍三年十月内、駕幸長安。十二月並無雨雪、齊州三藏及陽俊闍梨、奏其僧入内、念誦經二七日。應天皇帝、即遣清虚、任選寺而住。所云日西者、蓋屬聖上西歸也。般若神力、無願不果。

(校異)

主(黒・高・日)―□
天(黒・高)―天星

(大意)

長安四年(七〇四年)十一月のうち、本平公主が清虚(の祈祷)を進言した。大聖天后(則天武后)が病を患ったため、(清虚を)宮殿に入らせ、「金剛般若経」を、十四日間念誦させた。皇帝は命じて聞かれた。「師は寺に常住している僧侶か。客として滞在している僧侶か。」(清虚が)つい、(それに)対して答えていうには、「常住している僧侶である。」公主(皇帝の娘)及び宮人がその僧について語って言うには、「師は皇帝のご質問に対して嘘の回答をした。大いに有罪にあたる。まさに師を追放せよ。」

その僧(清虚)は自らの不運・不遇を恨み、聖人を欺いたため、すぐさま道場に入り、場所一つを乞い、ひたすら『金剛般若経』をよむこと一日一夜、夢で二人の僧侶が衆香寺禪院に向かい、主人に問うて言うには、「清虚師は身分と名声がいまだ成就を知らず、祠部の僧籍および安名はあるか否か。」主人が報じていうには、「まだのようだ。」僧侶(たち)が清虚に語って言うには、「日西が師に安名を与える。」神龍三年(七〇七年)十月に至り、長安に皇帝の駕幸があった。十二月に全く雨雪がなく、齊州三藏及び陽俊阿闍梨が、その僧(清虚)の宮殿入りを進言し、十四日間『金剛般若経』を念誦させた。応天皇帝(中宗)がすぐさま清虚を遣わし、寺を選び住むことを任せた。その日西という者は、実は聖上(天子・則天武后)のことであった。般若の神力に果たせない願いはない。

6 清虚(その六)

(本文)

去神龍元年、左補闕趙延喜、奏清虚入内祈雨。入經三宿、被一供奉僧誑其僧云。「武城殿上、好安道場處。」其僧不解、遂即進狀、六僧放阿師出外、祈請即出。向望春宮南山中。有一彌勒閣。於彼祈雨。一入道場、雲合還散。至三日内、遂覺疲極。乃向澗底、取水洗面。因臥眼合、見一給

使以手把杖打其僧頭。「阿師故向此間。因何臥地。努力強起。」其僧即起、還向閣下。盡心誦經。及至日西、四面雲合。不逾念頃、遂即大雨。直至明朝、雨便普足。

(校異)

云(黒・日)―□

武(黒・日)―□

狀勅語(黒・日)―□□□

一(黒・高・日)―□

遂(黒・高・日)―□

使以手(黒・高・日)―□□□

起(黒・高)―□

其(黒・高・日)―□

(大意)

さる神龍元年(七〇五年)のこと、左補闕の趙延喜が祈雨のために清虚を宮殿に入らせることを進言した。入ってから三晩が経過し、ある供奉僧にその僧(清虚)がこのようにたぶらかされた。「武城の殿上は道場を安置するのにいい場所だ。」その僧(清虚)は(たぶらかされことが)理解できず、進状してしまった。皇帝の言葉によって、なんと六人の僧侶が、師(清虚)が外に出て祈請できるようにして、(清虚は)出た。望春宮、南山(終南山)の間(中間)に向かった。一軒の弥勒閣があった。そこで祈雨を行った。道場に入るなり、雲の様子がまだ散っていた。三日(目)のうちに至り、突然、極度の疲れを覚えた。ゆえに谷の深いところに向かい、水をすくって顔を洗った。横になって目を閉じると、杖もつてその僧(清虚)の頭を叩いた。「師は何故にこの地に向かったか。なぜ地べたに横たわったか。頑張って起き上がれ。」その僧(清虚)はすぐ起き上がり、弥勒閣のもとに再び戻った。心を尽くし『金剛般若経』を誦誦した。日が暮れるまでに至り、突然四方から雲が集まった。わずかな時間も過ぎずに、なんと大雨になった。翌日の朝になったら、雨が十分となった。

7 呂文展(その一)

(本文)

閩州閩中縣丞呂文展、常誦金剛般若、三萬餘遍、靈驗若神。六七年前、一牙無故自落、至誠發願、牙即漸漸而生、今始長一半許。開元五年正月二日、又牙無故自落、依前發願、牙遂更生。老而牙生、蓋亦神助。

(校異)

なし

(大意)

閩州、閩中県丞、呂文展が常に『金剛般若経』を念誦すること(のべ)三万回余り、まるで神妙な靈驗があった。六、七年前に、歯が一本、訳もなく自ら落ち、真心をこめて發願したところ、歯が徐々に生えてきて、今は(生え)始めてから(もとの)半分ばかりあった。開元五年(七二七年)正月二日、また歯が訳もなく自ら落ち、前と同じく發願したところ、歯が再び生えた。老いてから歯が生えるとは、実に神の助けであった。

8 呂文展(その二)

(本文)

去開元三年、盛夏亢旱、草木焦黃。刺史劉瑗、令其精心誦金剛般若經一遍。未終、流澤滂霑、遠近皆足、年穀以登。其年春季、霖雨妨損蚕麥、別駕韋岳子、亦令文展誦經、應時晴朗也。

(校異)

なし

(大意)

さる開元三年(七一五年)、盛夏でひどい干ばつであり、草木が黄色く焦げた。刺史劉瑗が彼(呂文展)に心をこめて『金剛般若経』を一遍よませた。まだ終わらないうちに、流れている所や溜まっている所などに水が溢れ出して濡らし、遠近問わず充分になり、毎年収獲する穀物が豊作だ

った。その年の春季、大雨のせいで蚕と麦の収穫が妨げられて損を出したが、別駕の韋岳子が呂文展に『金剛般若經』を読ませると、(天氣が) すぐさま晴朗になった。

9 呂文展(その三)

(本文)

開元四年七月、當州亢旱、降長史劉孝忠、又令祈雨。從午時至申、細雨微降。及至初夜、天遂晴朗。即於庭前、至心發願、念誦般若、一遍未終、雨遂普霑。高下俱足。

(校異)

遍(黒・高・日)―□

(大意)

開元四年(七二六年)七月、當州では、ひどい干ばつが起き、長史劉孝忠がまた彼(呂文展)に祈雨を命じた。正午から申の刻(午後三時から五時頃)まで、細雨が少し降っていた。初夜(＝初更。午後七時から九時頃)に至り、天氣がついに晴朗になった。すぐに庭前で、心を込めて発願し、『金剛般若經』を念誦し、未だ一通り終わらないうちに広域に(雨が)降った。高いところも低いところもみな十分となった。

10 呂文展(その四)

(本文)

開元五年正月二十五日、屬以陰雨。刺史劉瑗、以明日既是甲子、若雨不晴、即恐經時亢旱、遂令文展念誦般若、至心祈晴。啓請誦經、應時雨霽、至甲子日、天甚晴朗。般若之力、其應若神。

(校異)

五(黒・日)―□

晴(黒・日)―□

即(黒・日)―□

時(黒・日・高)―寺

請誦(黒・日・高)―□□

神(黒・日)―□

(大意)

開元五年(七一七年)正月二十五日、最近しとすと雨が降り続く。刺史の劉瑗は、明日がすでに甲子の日であることから、もし雨が晴れなければ、時が経つにつれひどい干ばつに遭うかもしれないが、ついに文展に『金剛般若経』を念じ読誦させ、(文展は)心から晴れることを祈った。謹んで『金剛般若経』を讀誦していたら、ちょうどその時に雨がやんできて、甲子の日になって、天はとても晴朗であった。般若の力、その応驗は神意のようである。

(本文)

贊曰、道無一法、迹有三身。其化逾遠、其德彌真。忘心而聖、不念而神。惟誠惟懇、應感斯臻。

金剛般若経集驗記卷下終

(校異)

無(黒・日)―元

(大意)

贊に曰く、「悟りへの道には一つの方法だけがあるわけではなく、悟りに至るあゆみには三身(法身・報身・応身)のような三つのありようがある。その(仏の教えの)教化ははるかかなたまで広まり、その徳はいよいよ真実であることがわかる。たとえ心を忘れたとしてもりっぱな聖人であり、心の中で思うことがなくても神々に等しい。これこそ真実にして真心であり、感応の究極の姿である」と。

金剛般若経集驗記卷下 終わり